

第2章. 2001年6月 ブッシュ大統領へのインタビュー

そんなアメリカの絶頂期が始まったばかりの2001年6月、私はワシントンDCのホワイトハウスで、ブッシュ新大統領とインタビューする機会を得た。「9.11」の3ヵ月前のことである。当時のロシアを含むG8各国(地元の米国は除く)から一人ずつ記者が招待された。ホワイトハウスで最初に待たされた場所は「外交官ルーム」と呼ばれる部屋だった。照明を落とした少し暗めの円形の部屋で、壁には水色の絵が描かれていた。壁に沿って座れるようになっており、各国の外交官が集まった時、円形に座れば席順に優劣を付けなくてすむからだという。そこから会見場所の「リンカーン・ファミリー・ダイニングルーム」に移った。暗殺されたリンカーン大統領が家族と食事をともにしたプライベートなダイニングルーム。部屋には縦長のテーブルが置かれているだけで、豪勢な調度品の類いはなかった。ホワイトハウスの建物自体そうだが、内部は全体に抑制された造りになっており、「国王の宮殿」ではなく、国民から選挙で選ばれた民主主義国の大統領の「普通の家」を印象付けようとするかのようだった。

私の席はちょうどブッシュ大統領の真向かいに用意されており、手を伸ばせばすぐに届くぐらいの近さだった。大統領とのインタビューはワシントンに駐在する各国記者にとって最重要のミッションの一つである。特に新大統領の場合はより重要視される。折角のチャンスを最大限生かそうと米国経済のこと、日本経済のこと、日米貿易摩擦のこと、円ドル相場の行方などを矢継ぎ早に質問した。しかし、目の前のブッシュ新大統領から返ってくる答えは「小泉首相はいいやつだ。彼とならばうまくやっていけると思う」などと、日本の小泉首相との親密さをアピールする発言ばかりだった。肝心の答えは期待したものにはほど遠かったが、とにかく会見後、急いで支局に戻り、朝刊用に原稿を叩き込んだ。あまり内容がなかったにもかかわらず朝刊の1面アタマ記事になった。原稿を送り終えてほっとした私はスコウクロフト氏の警告をすっかり忘れていた。もちろん3ヵ月後に同時テロが迫っていることなど想像もしなかった。